

決して汚い怠けた、ぶた娘ではないといふので、
跳り廻つて、右のよゝに、云ひましたトサ。

湯屋の大黒天

三河境川源 近藤とき子

或る處にそれは極正直で人の應待の好い湯屋
がありまして、毎夜大賑やいであります。其の隣
に又性質の至つて好くない醫者がありました。診
察が下手な上に藥價が吃驚する程高いのですか
ら、誰れも診て貰ひに行くものはありません。或
晩の事、このお醫者が、お隣りの湯屋へ行きまし
た所が、餘りに賑ぎやうので、どうにも妬く思つ
て湯を使つて居ると、不圖向ふの柱に大黒天が祭
つてありました。そこでお醫者は、「やあ、當家の
繁昌するのは別ではない、彼の大黒天があるから

である」と想ひましたので、急に夫が慾しくなつ
てそつと盗んで家に歸り、神棚へ上げて祭りま
した。所が其の夜一時過ぎになると、「お願ひます
お頼みます」と戸を敲きますから、奥さんが起き
て、戸を開けますと、血氣な男二人り這りまして
「隣村の者でありますが、昨夜から父親病氣に罹
られました今の様子では、明朝までの生命が覺束
ない様に思はれますから、一度お診察が願ひたい
と思つて参りました、誠に夜更で濟みませんが、
どうぞ、今から私等と一所にお同道お診察してく
ださい」と頼みますと、醫者は直様起き上つて
『ハイ宜しい』、身仕度をなし、男に連れられて往
きました、道すがら是も大黒様のお蔭で、錢儲け
の端緒が出来たのだわいと思つて山路へ行き掛り
ました。すると、前の男俄かに懷劍をすらりと抜

き放ち、父親の急病とはそは大な詐り、着衣を渡さばよし、否と云へば此の劍の鞘にする」と嚇し付けられたので、醫者は、さ一大變と思つてすぐ眞裸体になり、命から一目散に吾家へ戻つてきて、いきなり前に祭つてあつた大黒天を庭に投げ出して、よくも己を眞裸にしたな、さ一覺て居れと、金鎚で散々なぐりつけました、すると大黒天は大に叫んで『コレ醫者待て、其方は全体何んと心得る己は湯屋の大黒様だからして、人を裸にするのが、商賣でないか』と申しましたとさ。

●第八號懸賞問答當撰

問 題

- (一) 起きて居るものを寝(猫)とはこれ如何
- (二) 虚言をつくことを法螺を吹くとはこれ如何

- (一) 一足の獸をう、さぎ(兎)とはこれ如何
- (二) 一足の獸をかもしか(羚羊)といふが如し
- (三) 水氣多きをみづなし(水梨)といふが如し
- (四) 見るもの食ひながら無し(梨)を食ふといふが如し。

●一 等 姫路市五郎右衛門邸 大竹さく子

- (一) 一側(い)に居るものを死々(獅子)といふが如し
- (二) 俗氣(りんき)することをやきもちを焼くといふが如し
- (三) 一疋(い)の虫を鎌錐(蛭螂)といふが如し
- (四) 有るものを食ひながら無し(梨)を食ふといふが如し。

●二 等 埼玉縣川越女子學院 山田 穰

- (一) 一側(そば)に居てもいぬ(犬)といふが如し
- (二) 諂諛者(あつかひの)をたいこもち(幫間)といふが如し
- (三) 一疋(い)の獸をかもしか(羚羊)といふが如し
- (四) 水氣多きをみづなし(水梨)といふが如し

●三 等 神田區維子町三十一番地宮本方 林 かね子

- (一) 來るものを去る(猿)といふが如し